「わたし」←(言葉)→「わたし」

9 月号の続きとして書き始めるならば、「わたし」と「わたし」をつなぐ大切なツールは言葉です。先日県内のある特別支援学校（以前の名では養護学校）の授業を見る機会がありました。小学部の６年生が２人の先生と一緒に、紙漉きをしていました。次週にせまった修学旅行で、おみやげにするのだそうです。牛乳パックからパルプ液を作り和紙を作るのです。子どもたちは熱心に活動していましたが、少し異様な感じがしたのは、先生たちがほとんど言葉を発しないことでした。妙に静まり返っているのです。言葉に刺激されやすい子がいるのだろう、あるいは働いているときはしゃべらないということなのかな、などと考えました。それがある瞬間から一変しました。授業が終わったそのときです。とたんに先生たちが口を開きだしました。「かたづけて」「教室に帰るよ」「〇〇ちゃんまだだよ」「次は給食の用意だよ」・・・。それはどれも指示（または命令）の言葉でした。改めて、授業の間にも先生の言葉を聞けたら、と思いました。「いいのができたね」とか「じようずになったね」とか「修学旅行、たのしみだね」とか・・・。

言葉は「わたし」と「わたし」の間にあるものです。それは双方向（←と→）のものです。本文のタイトルに掲げたとおりです。伝え合ったり、分かり合ったりするという双方向です。双方向というのは会話し合うだけではありません。涼しい風が吹いたとき「あぁいい風！気持ちいいね」と言ったとき、相手が黙っていても、風の心地よさを実感し合い、共感していれば、その言葉は双方向の機能を果たしています。一方、指示や命令は片側通行です。

私たちは子どもに対してどんな言葉を発しているかを吟味してみたいものです。赤ちゃんの時代、お母さんは子どもにたくさん言葉を掛けたでしょう。ミルクを飲ませながら「おいしいね、おなか空いてたんだ」と言い、オムツを替えながら「臭い臭いだね、ほら気持ちよくなったでしょ」と言ったのではないでしょうか。このような言葉は、相手から赤ちゃんですから、言葉が返ってくる会話にはではありません。でもそれは双方向（← →）の性格を豊かに持っていると感じさせます。気持ちを通い合わせたいというものがあるからでしょう。

一方会話のような形をしていても、実は違う母と子の言葉のやり取りがあります。いけないことをしてしまったＡちゃんとお母さんの“会話”です。

母「これはしていいこと？ 悪いこと？ どっち！！！」

Ａ「・・・わるいこと・・・」（としか答えようがない）

母「悪いこととわかっていて、なぜやったの！」

Ａ「・・・」（黙っているか、言い訳するか、だれか他の人のせいにするかしかない）

母「黙ってないで何とか言いなさい！」

Ａ「・・・ゴメンナサイ・・・」（そろそろこれを言う頃合かなと考えて）

以下、延々と続くかもしれないこのようなやり取りは、会話でもなんでもありません。むしろ言葉による折檻であり、言葉による拷問のようなものです。一見母と子が会話し合っているようですが、子どもは完全に言葉を封じられているからです。「いけないことを言葉で子どもにわからせる」ことも良いことです。けれどもこの種の会話で子どもが学ぶのは空疎な「ゴメンナサイ」です。そして体験しているのは、自分の思考や言葉の圧殺であり、子どもに残るのは鬱積した心です。

赤ちゃんの時代に掛けた言葉をもう一度取り出して、使ってみませんか。